

2007 年の日本の主な火山活動

【北海道地方】

知床硫黄山

5 月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、北西側中腹の爆裂火口の噴気などの状況に変化はなかった。

羅臼岳

5 月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、羅臼岳やその周辺に噴気は認められなかった。

摩周

3 月、7 月及び 8 月に行った上空からの観測（北海道開発局及び北海道の協力による）では、カムイヌプリ付近に噴気は認められなかった。

アトサヌプリ

3 月、7 月及び 8 月に行った上空からの観測（北海道開発局及び北海道の協力による）及び 7 月、8 月及び 11 月に行った現地調査では、アトサヌプリ溶岩ドームの噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

雌阿寒岳

3 月に振幅の小さな地震が一時的にやや増加したが、その後は地震活動は低調に経過した。

5 月及び 9～10 月に行った現地調査では、ポンマチネシリ 96-1 火口及び赤沼 06 火口群の温度¹⁾の低下傾向が引き続き認められた。その他の火口等の噴煙の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。また、3 月、7 月及び 8 月に行った上空からの観測（北海道開発局及び北海道の協力による）では、赤沼火口、北西斜面 06 噴気孔列やポンマチネシリ 96-1 火口の噴煙の状況に変化はなかった。

地磁気連続観測²⁾では、96-1 火口付近の地下の温度低下を示す変化が続いている。

地殻変動に特段の変化はなかった。

1) 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器であり、熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。

2) プロトン磁力計による観測。火山は磁石のように磁気を帯びている。火山体内部で温度上昇があると、山頂火口の北側で全磁力値が増加し、南側で減少がみられる。

丸山

2 月、7 月及び 8 月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、山頂北西斜面の火口列に噴気は認められなかった。

大雪山

2 月、7 月、8 月及び 11 月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、旭岳地獄谷爆裂火口の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

十勝岳

2006 年 1 月以降、62-2 火口の噴煙活動や火口温度は次第に低下したことから、2 月に火山活動は静穏な状況となった。

62-2 火口周辺で行った GPS 繰り返し観測では、6 月に 62-2 火口付近の膨張を示す地殻変動が確認されたが、7 月、8 月及び 9 月の観測では、膨張傾向の継続は認められなかった。また、山麓での GPS 連続観測には特段の変化はみられなかった。

2 月、7 月、8 月及び 11 月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）及び 6 月及び 9 月に行った現地調査では、62-2 火口及びその周辺の火口の噴煙の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

地震活動は低調な状態で経過した。

利尻山

2 月及び 8 月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、山頂部や南山麓に噴気や地熱域¹⁾は認められなかった。

樽前山

5 月、7 月、8 月及び 10 月に行った現地調査では、A 火口及び B 噴気孔群では高温¹⁾の状態が続いていた。また、3 月、5 月及び 11 月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、山頂ドーム及びその周辺の火口の状況に変化はなかった。

10 月に行った地磁気繰り返し観測²⁾では、特段の変化は認められなかった。

10 月に山頂ドーム周辺で行った GPS 繰り返し観測では、山体直下のわずかな膨張が引き続きみられたが、山麓での GPS 連続観測では特段の変化はなかった。

地震活動は低調な状態で経過した。

えにわだけ 恵庭岳

5月及び11月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、山頂東側の爆裂火口で従来から見られていた弱い噴気が認められた。

くつたら 倶多楽

繰り返し行った現地調査や3月、4月及び11月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、地獄谷や大湯沼等の状況に特段の変化はなかった。

5月3日朝、大正地獄で熱湯が噴出しているとの通報があり、同日午後札幌管区气象台及び北海道大学が行った現地調査で、ごく小規模な泥混じりの熱湯の連続的な噴出が確認されたが、その後は、噴出は間欠的になり、噴出の高さ・頻度ともに次第に弱まり、6月以降は時々見られる程度となっている。

地震活動は低調な状態で経過した。

うずざん 有珠山

5月及び9月に行った現地調査では、西山西麓火口群及び山頂火口原の噴気や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。また、3月、5月及び11月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、西山西麓火口群及び山頂火口原の噴気の状況に変化はなかった。

地震活動、噴煙活動は低調な状態で経過した。

ようていざん 羊蹄山

5月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では羊蹄山に噴気は認められなかった。

ニセコ

5月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、イワオヌプリ山頂部や五色温泉付近に噴気は認められなかった。

ほっかいどうこまがたけ 北海道駒ヶ岳

山腹のGPS連続観測ではわずかな山体膨張が継続した。

5月及び10月に行った現地調査では、昭和4年火口等の噴煙の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。また、3月、7月、10月及び11月に行った上空からの観測（北海道開発局及び北海道の協力による）では、昭和4年火口等の噴煙の状況に変化はなかった。

10月に山頂付近で行ったGPS繰り返し観測及び地磁気繰り返し観測²⁾では、特段の変化は認められなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で経過した。

えざん 恵山

11月に行った現地調査では、溶岩ドーム西側の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。また、3月、7月及び10月に行った上空からの観測（北海道開発局及び北海道の協力による）では、溶岩ドーム西側の噴気の状況に変化はなかった。

11月に行ったGPS繰り返し観測では、特段の変化は認められなかった。

12月に振幅の小さな地震が一時的にやや増加したが、その他は地震活動は低調な状態で経過した。

あしまおしま 渡島大島

10月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、山頂付近に噴気は認められず、中央火口丘の地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

【東北地方】

いわきざん 岩木山

8月に行った現地調査では、赤沢上流爆裂火口跡及び鳥ノ海火口に噴気は認められなかった。

地震活動は低調な状態で経過した。

いわてざん 岩手山

7月に継続時間は短いですが、振幅のやや大きな火山性微動が観測されたが、地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、東北大学の傾斜計³⁾等による地殻変動観測でも特段の変化は認められなかった。

8月に行った現地調査及び12月に行った上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）では、大地獄谷の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で経過した。

3) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの注入等により変化が観測されることがある。

あきたこまがたけ 秋田駒ヶ岳

10月に行った現地調査では、^{めたけ}女岳山頂部の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

地震活動は低調な状態で経過した。

くりこまやま 栗駒山

7月に行った現地調査では、ゼツタ沢上流の地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

地震活動は低調な状態で経過した。

あづまやま 吾妻山

火山性地震は 2006 年 11 月以降減少したもののやや多い状態が続いていたが、4 月頃より少ない状態で経過した。

大穴火口周辺で行った GPS 繰り返し観測では、2006 年 7 月から地震増加と同時に大穴火口付近の浅い所の膨張が認められたが、2007 年 4 月以降はほぼ横ばいの状況が続いた。山体での GPS 連続観測には特段の変化は認められなかった。

8 月に行った現地調査では、大穴火口の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

あだたらやま 安達太良山

6 月に行った現地調査では、沼ノ平火口の噴気や地熱域の状況に特段の変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

ぼんたいさん 磐梯山

6 月と 10 月に振幅が小さく、継続時間の短い火山性微動が観測されたが、微動発生の前後で地震の増加はなく、噴気などの表面現象の状況にも特段の変化は認められなかった。

10 月に行った現地調査では、山体北側火口壁及び沼の平の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

【関東・中部地方、伊豆・小笠原諸島】

なすだけ 那須岳

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

くまつしらねさん 草津白根山

7 月に振幅の小さな火山性微動が観測され、湯釜付近の浅い所を震源とする振幅の小さな地震が一時的にやや増加した。また 8 月にも火山性微動が観測されたが、いずれも振幅は小さく継続時間も短かった。11 月に湯釜の南側のごく浅いところを震源とする振幅の小さな火山性地震が一時的にやや増加した。

11 月 7 から 8 日にかけて行った現地調査では、湯釜北方斜面の噴気温度や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

噴気の状況や地殻変動に特段の変化は認められなかった。

あさまやま 浅間山

噴煙活動はやや活発な状態が続いた。

二酸化硫黄放出量は一日あたり 40～800 トンとやや少ない状態が続いた。

5 月に行った山頂付近の現地調査及び上空からの観測（陸上自衛隊、群馬県の協力による）では、火口内は高温状態¹⁾が続いていた。

地震活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

にいがたやばやま 新潟焼山

地震活動は低調な状態で、新潟県土木部砂防課の焼山温泉監視カメラでは噴煙活動に特段の変化はなかった。

やけどけ 焼岳

10 月に従来と比べ噴気がやや多いとの連絡があったが、上空から行った観測（国土交通省北陸地方整備局の協力による）の結果、噴気量や噴気孔の位置に特段の変化はなかった。

焼岳付近を震源とする地震活動は低調に経過した。

焼岳近くの住民が 12 月 18 日未明にドーンという音を聞くとともに、国土交通省神通川水系砂防事務所のライブカメラで赤い光を見たとの連絡があったが、焼岳付近の地震観測点には、当該時刻に噴火等に伴うと思われる震動記録はなかった。翌 19 日に国土交通省北陸地方整備局の協力を得て行った上空からの観測でも、噴火等の跡は認められず、噴気量にも特段の変化はなかったことから、この現象は火山活動に関連したものではないとは考えられる。

おんたけさん 御嶽山

5 月に行った現地調査で、79-7 火口から北東方向約 200m の範囲に、3 月頃にごく小規模な噴火が発生したと考えられる火山灰を確認した。

2006 年 12 月下旬から山頂付近の浅い所を震源とする振幅の小さな火山性地震が増加し始め、増減を繰り返しながらやや多い状態が続いたが、4 月以降は少ない状態で経過した。1 月 19 日以降は振幅の小さな火山性微動が発生し、増減を繰り返していたが、4 月頃より時々発生する程度で経過した。

気象庁及び国土地理院による GPS の地殻変動観測では、2006 年 12 月から御嶽山の地下での膨張を示すと考えられるわずかな伸びの変化が認められたが、4 月頃にはほぼ収まった。

剣ヶ峰の南東約 14km に設置してある遠望カメラで、3 月 16 日以降山頂付近の少量の噴気が時々

観測された。遠望カメラで噴気が観測されたのは、2003 年 9 月 22 日以来である。3 月 16 日に長野県が行った上空からの調査では、この噴気が地獄谷上部からのものであることが確認された。その後も弱い噴気は時々観測されている。

1 月、2 月及び 6 月に行った上空からの観測（長野県の協力による）では、山頂部の噴気の状態に特段の変化はなかった。

白山

地震活動は低調な状態で、国土交通省金沢河川国道事務所の土砂災害監視用カメラでは山頂部に噴気は認められなかった。

富士山

地震活動は低調な状態で経過した。

箱根山

1 月に駒ヶ岳の南東約 2 km 付近の浅い所を震源とするマグニチュード⁴⁾2.3 の地震が発生し、箱根町湯本で震度 1 を観測した。また、2 月には、駒ヶ岳の南西側を震源とする地震がやや増加した。最大の地震はマグニチュード⁴⁾2.1 であった。いずれの地震活動でも、気象庁が湯河原に設置している体積歪計⁵⁾や神奈川県温泉地学研究所の傾斜計³⁾等による地殻変動観測には特段の変化はなかった。また、環境省インターネット研究所の箱根・大涌谷カメラでは大涌谷の噴気等に特段の変化はなかった。

5 月及び 12 月に行った上空からの観測（神奈川県協力の協力による）及び 12 月に行った現地調査では、大涌谷の噴気等に変化はなく、火山活動は静穏に経過している。

4) マグニチュードは地震の規模を示す。

5) センサーで周囲の岩盤から受ける力による体積の変化をとらえ、岩石の伸びや縮みを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの注入等により変化が観測される。

伊豆東部火山群

1 月に伊東市街の西北西 6 km 付近の浅い所を震源とする地震が一時的にやや増加した。最大地震はマグニチュード⁴⁾2.5 で、熱海市網代などで震度 1 を観測した。11 月には伊東市城ヶ崎の沖合 4 km 付近の深さ約 5 ~ 8 km を震源とする地震が一時的にやや増加した。最大の地震はマグニチュード⁴⁾3.7 で、東伊豆町で震度 3 を観測した。これらの活動時も含めて、火山性微動及び低周波地

震は観測されず、地殻変動にも特段の変化はなかった。

伊豆大島

GPS、光波距離計⁶⁾及び体積歪計⁵⁾による連続観測では、2006 年 8 月頃からわずかな収縮傾向が続いていたが、2007 年 3 月頃から再び深部へのマグマ注入によると考えられる島全体の膨脹傾向が 7 月以降やや鈍化したもののみられた。

毎月行っている現地調査では、三原山山頂火口内及びその周辺に引き続き弱い噴気が認められた。三原山山頂火口内の中央火孔の温度や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

4 月から 7 月にかけて、島内及び西方海域で地震の増加が時々みられたほか、体を感じる地震が時々発生した。特に 7 月 20 から 21 日にかけては、島の西部から西方海域で地震が多発し、震度 1 以上を 29 回観測した。最大の地震はマグニチュード⁴⁾4.4 で、震源に近い伊豆大島町岡田及び元町で震度 3 を観測した。これらの地震活動に伴って、体積歪計⁵⁾や傾斜計³⁾による地殻変動データに特段の変化は認められなかった。

6) レーザーなどを用いて山体に設置した反射鏡までの距離を測定する機器。山体の膨張や収縮による距離の変化を観測している。

三宅島

二酸化硫黄放出量は一日あたり 800 ~ 6,400 トンで、依然として多量の火山ガス放出が続いている。また三宅島の火山ガス濃度観測によると、山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

山頂火口直下を震源とする火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。空振を伴う低周波地震が時々発生したが、いずれも地震発生時の噴煙状況に特段の変化は認められなかった。

噴煙高度は火口縁上 200 ~ 300 m で推移した。

1 月、2 月、3 月、4 月及び 6 月に行った上空からの観測（航空自衛隊、海上自衛隊、警視庁及び東京消防庁の協力による）では、火口内の地形等に大きな変化はなかった。また、山頂火口南側内壁に位置する主火口及びその周辺には引き続き高温部分が認められたが、地表面温度分布¹⁾に特段の変化はみられなかった。

地磁気連続観測²⁾では、山体内部の温度低下を示す変化が鈍化しながらも続いている。

GPS 連続観測では、山体浅部の収縮が徐々に小さくなりながら継続している。

八丈島

地震活動は低調な状態で経過した。

硫黄島

国土地理院及び防災科学技術研究所の観測によると、島内の地震活動は、1月に低下したもののその後も一時的な増加を繰り返すなどやや活発な状態で経過していたが、11月に入り落ち着いた状態となっている。2006年8月以降見られていた島全体が大きく隆起する地殻変動は、1月に鈍化したものの継続している。

海上自衛隊硫黄島航空基地隊気象班により、島西部の阿蘇台陥没孔^{あそだいがんぼつこう}で12月19日から20日にかけての夜間に熱泥水が噴出したとみられる跡が確認された。

気象庁は平成19年11月22日より、硫黄島の火山名の呼称を「いおうじま(Lojima)」から「いおうとう(Ioto)」に変更した。

福徳岡ノ場

海上保安庁、第三管区海上保安本部及び海上自衛隊による上空からの観測では、福徳岡ノ場付近の海面に、火山活動によるとみられる変色水が確認された。

【九州地方、南西諸島】

九重山

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

阿蘇山

毎月行っている現地調査では、中岳第一火口の湯だまりの湯量や表面温度¹⁾に特段の変化はなかった。9月15日夜、阿蘇火山博物館の火口カメラにより、中岳第一火口南側火口壁の一部の噴気孔で赤熱現象が確認された。この現象はその後も確認されている。

二酸化硫黄放出量は、一日あたり100～500トンとやや少ない状態が続いている。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動や地磁気²⁾に特段の変化はなかった。

なお、南阿蘇村吉岡では、5月に噴気孔の一つが閉塞し、その西側約5mの位置に新たな噴気孔が形成されているのを確認したが、南阿蘇村吉岡の全体的な噴気量に変化は認められなかった。

雲仙岳

10月に行った現地調査では、平成新山の地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

霧島山(新燃岳)

2006年12月に火山性地震が一時的に多発し、2007年1月頃までやや多い状態で経過した。また、8月にも火山性地震が一時的にやや増加した。これらの期間を含め、火山性微動は観測されず、遠望カメラ(火口の南西約7kmに設置)では、火口縁を超える噴気は観測されなかった。

GPS連続観測及び9月に行ったGPS繰り返し観測では、新燃岳のわずかな山体膨張が継続している。

9月に行った地磁気繰り返し観測²⁾では、特段の変化はなかった。

霧島山(御鉢)

2月に振幅のやや大きな火山性微動が発生したが、その後は振幅の小さな火山性微動が時々発生する程度で経過した。

7月に火山性地震が一時的にやや増加し、振幅の小さな火山性微動が観測された。

7月に行った現地調査では、噴気活動は低調な状態であった。

火口縁を超える噴気は認められず、地殻変動に特段の変化はなかった。

桜島

5月16日06時13分に昭和火口のごく小規模な噴火を観測した。昭和火口の噴火を観測したのは、2006年6月20日以来である。その後、昭和火口では、噴煙高度が火口上500m程度のごく小規模な噴火が断続的に発生していたが、20日以降は、噴煙が火口上1,200～1,800mまで上がる小規模な噴火も時々発生するようになり、6月5日には噴煙を火口上2,400mまで上げる噴火が発生した。しかし、6月22日以降は噴火は観測されなかった。5月17日に行った上空からの観測(国土交通省九州地方整備局及び大隅河川国道事務所の協力による)では、2007年の噴火が、昭和火口が南側に拡大してできた新たな噴出口で発生したことを確認した。5月24日に行った上空からの観測(鹿児島県の協力による)では、昭和火口内に溶岩は認められなかった。

南岳山頂火口では爆発的噴火が時々あったほか、小規模な噴火も発生した。

火山性地震及び火山性微動は5月上旬まではやや多い状態であった。その後減少したが、10月下旬頃より再び増加し、消長を繰り返しながらや

や多い状態が続いた。

二酸化硫黄放出量は、5月の昭和火口の噴火開始以降、一日あたり2千～3千トン（京都大学防災研究所、東京工業大学及び東京大学の観測による）に増加したが、6月以降は減少し一日あたり500トン前後と噴火以前の状態に戻った。10月頃より再びやや増加し、一日あたり1,000トン前後となっている。

国土地理院のGPS観測によると、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部へのマグマ注入による膨張が引き続き観測されている。

まつまいおうじま 薩摩硫黄島

硫黄岳山頂火口の噴煙活動はやや活発な状態が続き、噴煙高度は火口縁上400～600mで推移した。

火山性地震はやや多い状態で経過した。火山性微動が時々観測されたが、いずれも継続時間が短く振幅の小さいものであった。

12月に行った上空からの観測（海上自衛隊の協力による）では、硫黄岳山頂火口及びその周辺の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

くちゅうらぶじま 口永良部島

火山性地震及び火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。

1月、5月、11月に行った現地調査では、新岳火口内及びその周辺で引き続き熱活動の高まりが認められたが、12月に行った上空からの観測（海上自衛隊の協力による）では、新岳火口及びその周辺の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はな

った。

京都大学防災研究所及び産業技術総合研究所のGPSによる地殻変動観測により、2006年8月以降新岳火口付近の膨張傾向が認められていたが、気象庁のGPS連続観測、GPS繰り返し観測及び光波測距繰り返し観測³⁾では、膨張傾向は2006年12月に入って鈍化し、2007年6月にはほぼ停止した。

遠望カメラ（新岳火口の北西約3kmに設置）による観測では、4月頃までは新岳火口周辺の噴気地帯で高さ10m程度の弱い噴気が時々観測されたが、その後は観測されていない。

すねのせじま 諏訪之瀬島

爆発的噴火が時々発生したほか、小規模な噴火が発生するなど、噴火活動は活発な状態で経過した。十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、時々集落（御岳の南南西約4km）で降灰が確認された。

火山性地震及び火山性微動は増減を繰り返しながら多い状態で経過した。

12月に行った現地調査及び上空からの観測（海上自衛隊の協力による）では、御岳火口の噴煙の状況およびその周辺の地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

いおうとりしま 硫黄島

1月、4月、7月及び10月に海上から行った観測では、従来から見られていたごく弱い少量の白色噴気が認められた程度で、火山活動に特段の変化はなかった。

資料 1 2007 年の火山情報発表状況（月別発表数）

火山名	情報種別	平成19年（2007年）											
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	年計
十勝岳	観測		1										1
御嶽山	観測	3	8	5	4	6							26
三宅島	観測	5	4	5	4	4	4						26
霧島山（新燃岳）	観測	1											1
霧島山（御鉢）	観測		1	1									2
桜島	観測					1							1

注 1) 表中の観測は火山観測情報を示す。

注 2) 平成 19 年 12 月 1 日より噴火警報及び噴火予報の発表を開始し、それに伴い従来の緊急火山情報、臨時火山情報及び火山観測情報は廃止した。

資料 2 2007 年の噴火警報及び噴火予報発表状況

噴火警戒レベル導入火山

火山名	噴火警報又は噴火予報（12月1日発表）
樽前山	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
北海道駒ヶ岳	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
岩手山	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
吾妻山	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
草津白根山	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
浅間山	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
富士山	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
伊豆大島	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
九重山	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
阿蘇山	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
雲仙岳	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
霧島山（御鉢）	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
霧島山（新燃岳）	噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）
桜島	火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）
薩摩硫黄島	火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）
口永良部島	火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）
諏訪之瀬島	火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）

噴火警戒レベル未導入の火山

火山名	噴火警報又は噴火予報（12月1日発表）
三宅島	火口周辺警報（火口周辺危険）
硫黄島	火口周辺警報（火口周辺危険）
福德岡ノ場	噴火警報（周辺海域）（周辺海域警戒）
上記以外の活火山（89火山）<注>	噴火予報（平常）

計 108 火山

<注> 上記以外の活火山（89火山）は以下のとおり

知床硫黄山、羅臼岳、摩周、アトサヌプリ、雌阿寒岳、丸山、大雪山、十勝岳、利尻山、恵庭岳、倶多楽、有珠山、羊蹄山、ニセコ、恵山、渡島大島、恐山、岩木山、八甲田山、十和田、秋田焼山、八幡平、秋田駒ヶ岳、鳥海山、栗駒山、鳴子、肘折、蔵王山、安達太良山、磐梯山、沼沢、燧ヶ岳、那須岳、高原山、日光白根山、赤城山、榛名山、横岳、新潟焼山、妙高山、弥陀ヶ原、焼岳、アカンダナ山、乗鞍岳、御嶽山、白山、箱根山、伊豆東部火山群、利島、新島、神津島、御蔵島、八丈島、青ヶ島、ペヨネース列岩、須美寿島、伊豆鳥島、嬬婦岩、西之島、海形海山、海徳海山、噴火浅根、北福德堆、南日吉海山、日光海山、三瓶山、阿武火山群、鶴見岳・伽藍岳、由布岳、福江火山群、米丸・住吉池、若尊、池田・山川、開聞岳、口之島、中之島、硫黄島、西表島北北東海底火山、茂世路岳、散布山、指臼岳、小田萌山、択捉焼山、択捉阿登佐岳、ベルタルベ山、ルルイ岳、爺爺岳、羅臼山、泊山（火山の順は日本活火山総覧（第3版による））